



Contents

- 🌲 地域における水源林造成事業の取組
鮭の母川を育むふるさとの森づくり
— 高根第一造林地 新潟水源林整備事務所 —
- 🌲 地域における森林・林業の取組
森林資源の循環利用の取組 — 山口県東部森林組合
- 🌲 国立研究開発法人 森林研究・整備機構
令和7年度評価及び
第5期中長期目標期間の業務の実績に関する評価について
- 🌲 みどりのとびら～つたえま水源林～
各地の森林・林業・緑化イベントに出展します！



Forest Management Center

第22号 2026.9

表紙の写真/山口県周南市での水源林造成地の様子です。

水源林 季刊

鮭の母川を育むふるさとの森づくり

－ 高根第一造林地 新潟水源林整備事務所 －



写真：複層林誘導伐後の高根第一造林地

新潟県最北端に位置する^{むらかみし}村上市は県内最大の面積を有し、日本海と広大な山々に囲まれた自然豊かな城下町と独自の「鮭文化」で知られています。地形は起伏に富んでおり、村上城跡がある^{がぎゅうさん}臥牛山のように、歴史ある史跡と豊かな自然が融合した里山もあれば、東部から北部にかけては^{あさひ}朝日連峰や^{いいで}飯豊連峰へと続く険しい山々が連なる地域もあります。標高 780m の^{なるみやま}鳴海山は、今回ご紹介する^{たかね}高根集落にあり、その山頂から北西斜面にかけて樹齢 100 年以上のブナ原生林が広がり、県の自然環境保全地域にも指定されています。

同市の森林整備計画によると、市の総面積 117,417ha のうち森林面積は 99,978ha。全体の 85.1% を林野が占めています。民有林は 53,226ha でこのうち人工林面積は 18,515ha。民有林における人工林率は 34.8% と県平均の 24.9% を大きく上回り、県内有数の木材生産地にもなっています。

冒頭にもあるとおり、村上と言えば、冬の足音が近づく頃^{みおもてがわ}三面川へ産卵のために一斉に遡上してくるサケを捕獲し、豪雪地帯で知られるこの地の厳しく冷涼な寒気と潮風でおいしく熟成させた「塩引き鮭」が有名で「鮭のまち」のイメージが強いところですが、村上市とその隣の関川村で生産される「いわふね杉」は、冬が長い地域の特性から細かな木目と年輪が美しく、しなやかで粘り強い材質で、高根集落を含めたこの地域は、明治の頃からスギの造林適地としても知られています。また村上は、伝統漆器^{むらかみぼりついでしゆ}「村上木彫堆朱」やシナノキの樹皮から作られる^{うえつ}「羽越しな布」といった木を使った伝統工芸も有し、城下町地域では今でも築 100 年以上の木造町屋や武家屋敷が多く残るなど、木と人々の暮らしとの結びつきの強さがうかがえます。

さらにここは、「平成の名水百選」（環境省）にも選ばれた「名水のまち」でもあります。サケの母川となる清流や綺麗な湧き水、長い歴史や伝統文化を支える木を育んできた森づくりの今日について、ご紹介します。

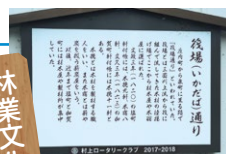
村上市と言えば・・・

海水からの製塩



綺麗な海水から作る名産品の塩。塩木という地域木材で釜炊きした伝統製法が今も受け継がれています。

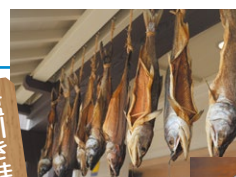
林業文化の名残



上：村上市内の筏場通り跡。かつては鮭漁とともに林業が栄えていた名残。

下：市内では歴史ある木造建築物が数多く残る。

塩引き鮭と鮭の文化



塩引き鮭など100種以上の料理で頭から尾まで残さず味わい尽くす鮭の食文化。鮭の「^{ぼせんかいき}母川回帰」の習性を活かした独自の増殖法は江戸時代にはじまりました。

高根第一造林地の複層林施業

1105号高根第一造林地は高根集落から^{てんがいさん}天蓋山に向かい車で30分ほど離れた山中に位置しています。この地域一帯は、冬期に積雪2メートルを超える特別豪雪地帯として知られています。

この造林地は、昭和51(1976)年に高根生産森林組合との2者による50年契約でスタートし、その後契約期間を、昭和56(1981)年に65年に、そして令和6(2024)年には140年に延長し、その際、複層林整備を導入することとして変更契約を結びました。現在の契約面積は253.71haで、このうち造林地面積は86.43haとなっています。

多雪地帯である現地の状況を考え保護樹帯、広葉樹区域を計画的に配置しています。作業道等の路網は造林地の中心を走る天蓋林道を起点として契約当初の昭和51(1976)年頃から整備がはじまり、その後も随時開設・整備等が重ねられ、着実に造林木伐採搬出の準備が整えられてきました。

平成20(2008)年頃には間伐材を販売し、初めての木材販売の収入を上げました。令和7(2025)年には複層林施業の更新伐により、スギ2.21haの主伐販売が実施されたところです。

この造林地で施業ができる期間は雪の降らない時期に限られ、一年の内の半分、およそ6ヶ月です。この短い期間内に、地形などを考慮して設定した小面積の伐区において、一気に伐倒・造材作業を行いたいところですが、高性能林業機械(プロセッサ)では対応できないほど“根曲がり”が生じている部分もあり、チェーンソーによる伐倒作業での対応を余儀なくされます。もちろん、保育の期間に雪起こしも実施していましたが、それでも雪圧が高く、雪によって変形等した造林木の伐採・造材の作業は一筋縄ではいかず、高度な技術を求められる施業現場となりました。

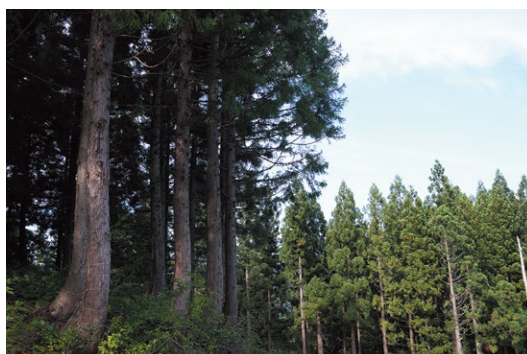
なお、高根生産森林組合は、本施業の実施に前後して、隣接する村上市の市行造林地においても主伐(皆伐)を実施しています。これら施業地域全体を俯瞰した時、1105号造林地の複層林施業により残された残存木には、伐採によるこの地域の環境への影響の緩和効果が期待されるところです。



1105号造林地 伐採跡と残存木



1105号造林地の伐採跡の根株



雪による根曲がりのある造林木



1105号造林地伐採後の様子



1105号造林地内で搬出に使われた路網

高根生産森林組合

遠山組合長理事にお話を伺いました

地域と生産森林組合



高根生産森林組合 遠山組合長理事(上)
高根集落の様子(中)、高根区民会館(下)

高根区民会館(活性化センター)は、平成17(2005)年に竣工しました。集落の多目的集会施設です。高根区事務所や高根生産森林組合の事務局も置かれ、地域住民や訪問者の活動拠点としても利用されています。



令和2(2020)年に高根フロンティアクラブが第59回農林水産祭むらづくり部門において天皇杯を受賞した時の表彰状



スギを主体とした森林に囲まれている高根集落

高根生産森林組合(新潟県村上市高根地区)は、昭和30(1955)年に旧朝日村の誕生とともに発足し、現在131人の組合員がいます。管轄は高根集落周辺の森林で約4,000haです。職員は、かつては30人以上所属していましたが、現在は常勤4人へと規模が縮小しています。高根地区は森林整備センターの「水源林50選」に選ばれたほか、高根フロンティアクラブ[※]等の地域活動が盛んな集落として知られています。

森林の構成の主なものとしては天然林約3,000haです。一方、人工林約800haの多くは分収林として整備され、素材生産や保育を中心に事業を展開しています。かつては高根生産森林組合でチップ工場やなめこ工場を運営し地域雇用を支えたこともありましたが、現在は高根チップ工場など、地元事業者と連携した木材の販売が中心となっています。

昭和51(1976)年に森林開発公団(森林整備センターの前身)の水源林造成事業として分収造林契約を結びました。広大な森林を集落だけで管理することは困難であり、水源涵養などの森林の機能を維持するためには森林整備センターの支援が不可欠だったと思われます。生産森林組合の規模は縮小していますが、「山は集落全体の財産」という意識は今も受け継がれています。山菜やキノコ、トチの実など山の恵みは地域の暮らしと密接に結び付いていますし、昔からの豪雨や昨今の気象災害が増える中で森林を守る重要性への認識は一層高まっているのではないのでしょうか。実際、4年前の豪雨では簡易水道施設が被災し、地域の人々は水と森林の大切さを改めて実感したと思います。

令和7(2025)年度からは更新伐・複層林施業に取り組んでいます。当初140年という長期契約へ変更することに不安もありましたが、皆伐ではなく小面積での更新によって森林を維持し、CO₂吸収や環境保全につなげるとの国の方針を踏まえ、地域全体で合意することにしました。

雪害や風害への懸念はあるものの、森林を持続的に管理できることが大きな利点と捉えています。なお、最近話題の山火事については、この地での発生は幸い少ないものの、クマやイノシシによる被害は増えており、「クマ剥ぎ」の被害も発生しています。

地域では森林を守りながら持続可能な山づくりを続けていく考えですが、最大の課題は担い手不足と生産森林組合の経営環境です。現場作業員は3人のみ、豪雪地帯の特徴として“曲がり木”が多く高性能林業機械が十分活用できず、チェーンソーによる作業が中心となる等、この地域特有の苦労もあります。また、積雪のため作業期間が半年程度に限られ、冬期は職員を地域内企業へ出向させる形で雇用を維持しています。木材価格の低迷や市場までの輸送距離の長さ、路網整備費の増加、豪雨による林道被害なども経営上の負担要素として大きいです。

一方で、高根フロンティアクラブの活動をきっかけとした1ターン人材の定着など明るい動きも見られます。

[※]高根フロンティアクラブは、平成8(1996)年に集落活性化を図るため有志が結成した団体



村上市、林業関係次世代の集い、そして地元の学生も参画して作製した木育の絵本“たかし山へ行く”



近年の薪ストーブ普及に伴い薪の需要増加（高根にて撮影）



遠山昭一組合長理事

課題

村上市周辺の林業は、豊富な森林資源を抱えながらも、担い手不足や木材価格の低迷により深刻な衰退に直面していると言われています。

村上市は、素材生産量も県全体の3割以上を占めるなど、本来は高い生産力を持つ地域です。しかしその広大な山林の維持は容易ではなく、鮭が遡上する三面川の源流域に位置する高根地区は、約 8,350ha の森林を擁する豊かな水源地でありながら、過疎化と極端な高齢化の進展により、かつては集落組合等主体で実施してきた手厚い資源管理や伝統的な林業の実施が難しくなっています。現在では、就業者の減少と高齢化によって「村上市森林整備計画」に掲げられた適切な間伐や路網整備などの施策が、山間部まで十分に行き届かず、結果として手入れ不足の人工林が増加し、林業の産業的な衰退だけでなく、土砂災害防止や水源涵養といった森林の公益的機能の低下、さらには山林の荒廃が大きな課題となっています。

地域と林業の未来を明るく

こうした担い手不足や森林荒廃といった林業の課題を解決するため、村上市では、レーザー測量やクラウドシステムを用いたスマート林業の検討・導入を進めるとしています。航空レーザー測量による資源データの「見える化」や、「森林クラウド」による森林情報の一元管理・情報共有を進め、過疎化・高齢化が進む山間部でも効率的かつ持続可能な森づくりができる林業現場環境を目指しているとのことです。

また、将来の林業を担う人材の育成や、若い世代の「木離れ」を防ぐため、幼児期から若者までを対象とした切れ目のない「木育」や学校教育と連動した「人づくり」などの林業振興施策を積極的に展開しています。

「市」と地元若手林業関係者による「次世代の集い」、そして「新潟放送 (BSN)」との3者で木育活動推進に関する連携協定を結び、様々な情報発信をしていま

す。そうした中、「たかし山へ行く」という絵本が令和7 (2025) 年に企画発行されています。地域の村上中等教育学校の生徒が作画し、「次世代の集い」の若手林業者の知識を交え作製された温かみのある絵本で、循環型林業の大切さを分かりやすく伝えています。一般向けの貸し出しや読書週間イベントにも活用されているそうです。次世代の主役である若い世代の人達が制作に携わることとなったきっかけは、「木材は山林にある」という認識が子ども達に伝わっていない事への危機感からだったと聞いています。

未来への希望として、森林整備センターには、特に長期的な森林づくりや人材確保、経済面での支援、J-クレジットなど新たな制度活用に向けた情報共有を期待しています。今後とも地域とセンターとが連携しながら、次世代へ豊かな森林を引き継いでいくことを目指していきたいと思います。

編集後記

複層林の事業と地域のこれから

高根第一造林地が複層林施業による“主伐”を迎えたということは、苗の植え付けから 50 年近くの年月が経過し、かつて整備作業に従事した年代の方々には森林整備の第一線から次々に退かれるなど、世代交代が現実となる一つの節目を迎えていると言えます。

高根生産森林組合や高根フロンティアクラブにおける1ターン促進等、外からの人材の受け入れや、村上市・林業関係次世代の集いの木育への取組は、“鮭が大きく育って母なる川に戻る”を信じた先人のように、厳しい時代の流れの中にも将来の山づくりを担う人材を「育てたい」との思いがあるように感じられました。

森林資源の循環利用の取組 – 山口県東部森林組合

本格的な利用期を迎えている我が国の森林資源については、持続可能な社会の実現という観点から、いかに循環的に利用していくかが大きな課題とされています。こうした中、近年、再生可能エネルギーの一つとして燃料用の木材チップなどの木質バイオマスが注目されています。国内に豊富にある森林資源を発電等に利用することは、エネルギー自給率の向上だけでなく、資源供給地域における経済・雇用への波及効果、「林地残材」の有効活用、さらには豪雨災害時の流木発生の抑制効果などにも期待が持てるとされています。

今回ご紹介する山口県東部森林組合が令和7（2025）年にオープンした錦バイオマスセンター（以下「錦 BC」という。）は、まさにこうした未利用材等を有効活用するための施設です。林業専門の事業体が建設した同様の施設としては全国でも最大級の規模を誇ります。錦 BC の円滑な運営と生産・供給を確固たるものとするため、加えて“森林資源の循環利用”の実現のため、木を伐った後のその先を見据えた「協議会」を立ち上げて取り組まれている様子などについて、山口県岩国市にある同組合の東部事業本部と Web をつないでオンラインでお話を伺いました。

森林整備センター広報部（以下「広報部」という。）：

本日はお忙しい中、Web インタビューにご協力いただきありがとうございます。

山口県東部森林組合（以下「山口東部」という。）：

よろしくお願いします。

広報部：早速ですが、貴森林組合の概況や特徴について教えてください。

山口東部：当森林組合が対象とする森林は、中国山地の林業の中心地域から瀬戸内海に面した地域の里山的な森林まで広がっています。これは平成 30（2018）年に「山口県東部森林組合」と「錦川森林組合」が、そして令和 4（2022）年には「周南森林組合」と「光大和森林組合」とも合併したためで、現在、組合員数も1万6千名近くにのぼります。払込出資金と5市5町の所有面積が県内最大規模となる組合です。岩国市に本所（東部事業本部）と支所が、そして周南市、光市、柳井市にも事業部・支所があります。設立の経緯などもあり、同じ森林組合の中とは言え、事業部ごとに取り組んでいる事業内容の特性も異なっています。

組合全体としての主な業務内容は、まずは森林整備事業・森林土木事業があげられ、高性能林業機械も多数所有しています。このほか木材加工や、最近では山の管理や持ち分の譲渡への相談業務であるとか、また、林業体験施設や昨年度オープンした錦 BC に関する業務を行っております。

森林整備センターとの繋がりで言えば、水源林造成事業の契約件数・面積は、令和 7（2025）年度末現在で 117 件・2,434ha ほどです。また昨年、錦 BC に約 1,570㎡の林地残材を持ち込んでもらいました。

広報部：林業機械も非常に多く所有され、精力的に森林整備に取り組まれている一方、Web サイトなど拝見すると、様々な新しい業務にもチャレンジされているようですね。



濃緑の部分が山口県東部森林組合の対象範囲

山口東部：DX（デジタルトランスフォーメーション）としては、山の現場業務については森林 GIS の活用も進め、また、ドローン2台を所有していて、現場の画像撮影等に用いて業務の省力化に役立てていますが、この分野ではまだまだこれからだと思っています。一方、先ほどからの話にありますとおり、対象区域も広く、各旧森林組合から引き継いだ業務・組合員を本部の一角で動かしていくのは困難なため、旧森林組合の所在地に事業部を置きつつ、本部において各事業部の情報や資料の共有化を図れるよう、クラウドシステムを用いて業務の効率化を行い効果を発揮しています。



上：東部事業本部内観
左：森林GISでの作業の様子

広報部：林業体験施設の運営にしても DX にしても、新しいことに取り組むアイデアや、実際に取り組むのに必要な組織力や原動力・行動力などはどういうところから来るのでしょうか？

山口東部：対象エリアも広く、様々な林相や林業の状況が異なる中、課題も多岐にわたるので、「色々やっていかなければ」という思いで取り組んでいます。

体験施設に関しては、隣県の都市部から観光目的で森林を訪れる方々も多いので、そうした一般の人向けに林業が体験できる素材・機会を提供できるのでは？とアイデアを出したところ、これに賛同してくれる職員がいたので、今は彼らに好きなようにやってもらっています。このためには、職員と日頃から積極的にコミュニケーションを取り、人となりや趣味なども把握し、適任者・やる気のある人に任せます。そして任せただけからには、あまり「かくあるべし」といった口出しはせず、自立的に自由にやってもらっています。そんな感じでやっているのです、うちの各施設を見学に来られた外部の方などから、「これが本当に森林組合なのですか？」などと驚かれることもあります。

広報部：それだけ自分に任せてもらえると、職員のモチベーションがあがるように思います。この業界全体の課題である「人材確保」についても、効果的なのではないでしょうか。

山口東部：林業の業界自体、残念ながら将来性・発展性が高いとは言えなく、また、待遇面でも強くアピールできる状況にはありませんが、山が好きな人や何らかの事情から地元に住たいという人が、「森林組合」に少しでも魅力を感じてもらえるよう努めています。例えば森林組合の建物もおしゃれにして、外観的な部分から林業のイメージアップということにも気を配っています。昔ながらのオーソドックスなスタイルからの脱却を図り、それによって「森林組合の仲間になって、やっていこう」と思ってもらえるような、そういう工夫もしています。

オフィスの様子など、是非、こちらに来て、実際に見ていただきたかったですね。



写真上：森林体験交流施設「丸太村」の芝生スペース
下(左右)：木工体験の様子（岩国市 周東町）

広報部：今回は何う機会が持てず、非常に残念です。ところで先ほど、「対象が広く多様な森林を抱え、課題も様々である」というお話でしたが、その課題や対応などについて、もう少し詳しく教えてください。

山口東部：当組合がカバーする森林は、この中国地方の林業中心地の森から、将来的に見ても林業をやっていくことが難しい海岸部や都市近郊の里山まで区々です。ですので、場所・場所にあった対応が求められています。

林業中心地では、森林所有者の所得アップを目的に事業を展開しています。一方、海岸部や里山においては、林業の採算を取るということは難しいのですが、環境整備によって地元の方々に喜んでいただこうと、対応を進めています。

また全国共通の課題で、ここでも高齢化や代替わり、不在村など、山の相続や管理に課題を抱えている方が増えています。当森林組合では、こうした扱いに困った山林についての相談を受け付け、無償での譲渡についても対応する事業を展開しています。こうして、できるだけ「地域の森林を守る」ということに積極的に取り組んでいます。

さらに、錦 BC において生産するバイオマスチップの原料に林地残材など、山の未利用材を使うことで、森林整備を進めて、山の付加価値を高め、地域における循環型社会の形成に役立つことを目指して取り組んでいるところです。



錦川交流センター 外観（岩国市 天尾）



同 内観

広報部：近年、豪雨災害が激甚化・頻発化しており、過去には山口県でも大規模な豪雨災害に見舞われていますが、この地域の方の「山への防災意識」はどのようなものでしょうか。

山口東部：実は、昭和の時代であれば、一度、豪雨災害が起されば、翌日は森林組合の電話が鳴り止まないほど、苦情・相談が寄せられ、小さなものでも被害状況が把握できたものでした。今は不在村地主も増え、所有者さんですら自分の山がどうなっているかを把握しておられないケースも多く、豪雨災害などであっても、被害状況が所有者から森林組合に伝えられるということがかなり少なくなりました。

これは、林業経営や森林管理への意欲・関心が低くなっていることの現れだと思いますが、災害時でさえ「山への関心が無い」という状況は、非常に問題だと感じています。だからこそ「森林組合として何ができるか」ということを日々考え、地域の森林を守っていくための取組を進めているのです。

広報部：そうした取組の一つとして、昨年新たにオープンした錦 BC について、ここから詳しくお話を聞かせてください。どれぐらいの方々が錦 BC に携わっておられるのでしょうか。

山口東部：錦 BC では、材料を機械に投入するのに人手は要りますが、それ以外の作業のほとんどは電動機械により全自動で行われるので、オペレーションに従事しているのは2〜3名です。山の方に材料を引き取りに行くのは組合直営作業員中心で、材料収集だけであれば5〜6名、木の伐採等まで含めたらもっと多くの職員が対応することになります。一方、製品の納入先への搬送については、外部への委託で対応しています。

広報部：運営にあたって協議会を設立していると伺っていますが、こういったものでしょう。

山口東部：「錦 BC 地元連絡協議会」（以下「連絡協議会」という。）と「錦 BC 森林資源循環利用事業推進協議会」（以下「事業推進協議会」という。）の2つの協議会を立ち上げています。



錦バイオマスセンター遠景

連絡協議会ですが、この錦 BC が、近くのダム建設の関係で使用されていた土地の跡地を利用して建てられた大きな工場で、稼働に際し地域に影響が出てくとも考えられるため、地元の皆様にこの施設を広く知ってもらうための開かれた場を設けたいという思いと、また、実際の稼働にあたり、地域と調整が必要になる場合のコミュニケーションが取れる仕組みを作っておきたいという思いから、設立しました。こちらの構成員は、錦町に数多くある自治会の連合会であるとか、地域の関係団体、それから岩国市、山口県の農林水産事務所、さらにチップの納品先である広島ガス株式会社の担当者の方にも加わっています。

さらにその下に「事業推進協議会」を立ち上げています。こちらは、膨大な量のチップを安定的かつ長期的に製造していくための事業実行に関する協議会です。チップ製造は当然、森林整備の推進とも関係し、地元の雇用の創出や産業の強化にも繋がってくることから、地元の複数の林業事業体だけでなく、お隣の島根県の林業事業体、さらには材料を集める業務に関心を有する土木業者など他業種の方々、また、先々を見据えて農業関係団体にもお声がけしているところです。

広報部：農業関係団体とは、どういう関わりになるのでしょうか。

山口東部：この取組は、単に山で木を伐り、伐った木を集めてきて、チップとして出して“終わり”ではなく、木を伐った跡に木を植える「循環」の中でこそ成り立つと考えています。ですから将来的に必要な「苗木」についても考える必要があります。当地域では、コンテナ苗の生産が少ないため、樹苗農協を通じて地元の農業法人に協力をお願いすることも想定して、という次第です。

広報部：しっかりと先々のことを見越し、そして地域での体制づくりを進めているのですね。



高性能林業機械による
林内作業の様子



枝条等を錦BCの機械に
投入している様子

広報部：非常に大規模な工場を稼働させ、大きな目標値も掲げておられるので、材料もそれなりの量が必要だと思いますが、一方で発電用チップとしての“品質管理”も重要であろうと考えます。木材の引き取りもされているとのことですが、中には受け入れが難しいという場合も出てくるのではないかと思います、その辺りの対応はいかがでしょうか。

山口東部：受け入れの大前提として、森林経営計画の対象であるとか伐採届がされていることなどの条件は設けていますが、基本的には木質残渣であれば全て引き取ることとしています。その上で、細かな品質管理が求められる発電用チップと、発電以外の目的に使うものとを仕分けて管理しています。ただし、多少古くなったものでも、分量次第では発電用として使うことができ、この点については、あらかじめ供給先と「どの程度のものなら多少混ぜても大丈夫か」といった確認を行っています。

このように受入の間口を広げているのは、まずは地元の皆様に、この錦BCがどういう施設であるか理解をしていただき、また、地元の方で「材を持ち込みたい」という要望があれば、できるだけこれに応えたいと思い、ある程度柔軟に受け入れができるよう、こちらの体制を整えています。

広報部：広島ガス株式会社に対し、今後20年間、かなりの量を供給する契約を結ばれているとのことですが、今後の見通しはいかがでしょうか。ライバル企業などはありますか。

山口東部：錦BCの稼働は1年前から、一方、広島ガスの「大野浦バイオマス発電所」は今年7月からの稼働で、錦BCからの供給も始まったばかりです。錦BCでは、この1年の間、大野浦以外の発電所(3か所)にチップを供給しながら、大野浦バイオマス発電所への供給に向けてのシミュレーションなどを行ってきました。今後、大野浦バイオマス発電所との契約量をクリアし、さらに余剰分が出た場合は、この3か所の発電所への供給なども視野に入れています。

ライバル企業としては、もしかしたら一時的に安い価格で供給可能な他者が現れるかもしれませんが、今のところこの辺り一帯で、山側と消費側との中間に位置し両者と結びつき、これほど大規模なチップ製造工場を持ち、山から材料を自ら集めてくることができ、安定的に供給できる体制を構築している事業者は他にはありません。この点、単に価格の面だけではない「強み」になっていると思います。

広報部：地元報道など見ても、「錦BC」に対する地域の期待は大きいのではないかと思います、いかがですか。

山口東部：この地域は、もともと林業地域でした。ということは、今、最も過疎化が進んでいる地域と言えます。

人がどんどん居なくなり町が寂れていく中、これほどの大きな施設ができて、毎日、人・車が入り出している。そして、ここで働いたり、外から来た関係者が飲み物を買ったりお弁当を買ったりするだけでも、「活気が出た」と言われます。また、今まで、自伐林家として自分の山を守ってこられてきた方々も、高齢になってきて、もう、自分だけで山の作業をすることが難しくなってきたことから、森林組合に対し「山の手入れをして欲しい」とか、「山で捨て置かれた枝などを持って行って欲しい」と言われたりと、ここでの取組への期待があると感じています。

広報部：当センターも、間伐・更新伐・主伐と「伐る」段階に入る山が増える中、“森林資源”は、無駄なく使うことは非常に重要だと思います。お話を伺っていて、貴組合が、しっかりと“先”を見据え、色々とチャレンジしてられていることに、感銘を受けました。

山口東部：うちのような組合は、もしかしたら昔ながらの森林組合からしたら、奇抜に見えるかもしれませんが、私どもとしては何とか「成功例」を示したいと思い、奮闘しています。「森林組合がこんなことやっても、結局、ダメだったじゃないか」などにならないように。と言っても、今、行っていることについては、正しいことだという自負があり、非常に良い流れができてきたと思っています。この流れを止めずに先に進めるためにも、森林整備センターから今後とも協力をいただければと思います。



東部事業
本部外観

山口県東部森林組合 概要

代表理事組合長 兼近 政士氏

正組合員 15,782名(令和8年5月31日現在)

主な業務内容：森林整備事業、森林土木事業、木材加工、錦BC(木質チップ製造)・錦川交流センター・森林・林業体験施設運営、関連会社にて山林譲渡・売却相談業務

所有林業機械：スイングヤーダ6台、ハーベスタ7台、フォワーダ7台、フェラーバンチャ1台、グラブプル13台、バックホウ4台

管内：岩国市、柳井市、周南市、下松市、光市、大島郡周防大島町、玖珂郡和木町、熊毛郡上関町、田布施町、平生町

令和7年度評価及び第5期中長期目標期間の 業務の実績に関する評価について

国立研究開発法人 森林研究・整備機構の「令和7年度評価」及び「第5期中長期目標期間の業務実績に関する評価」（以下「期間評価」という。）の結果が、令和8年8月28日に公表されました。

（農林水産省ウェブサイト：<https://www.maff.go.jp/j/kanbo/hyoka/dokuho/dokuho.html>）

農林水産大臣による、機構全体及び森林整備センターのみの取組の実績については、「令和7年度評価」及び「期間評価」とも「A」となりました。

本誌では、期間評価の結果を中心にをご紹介します。

森林整備センターの第5期中長期目標期間は令和3年度から7年度の5年間でした。この第5期の目標・計画の内容は、本誌第1号（2021年6月）でもご紹介しているとおり、自然災害が頻発・激甚化の中で、流域保全等における役割への期待が高まっていることを背景に、森林所有者、造林者及び市町村等の関係者との連携強化を一層図りつつ、「1 事業の重点化」、「2 事業の実施手法の高度化のための措置」及び「3 地域との連携」の3つの内容に取り組むとし、具体的な目標値としては、「重要流域等における針広混交林・育成複層林の造成面積：2,800ha/年」を掲げておりました。

1 事業の重点化

ア 流域保全の取組の推進

針広混交林や育成複層林^{※1}の造成面積は、年間2,800haの目標値に対し、令和3年度から7年度まで、毎年所期の目標を上回る実績（103%～121%）を上げ、間伐等の実施においても高い成果を上げました。また、既契約地周辺の被災リスクの高い森林等を対象に一体的な整備を行う「面的整備」^{※2}について、合計10か所で事業を推進しました。

※1 育成複層林：森林を構成する樹木を部分的に伐採し、その後植林を行うこと等により、年齢や高さの異なる樹木から構成されるよう人為的に造成・維持している森林

※2 面的整備：標準伐期齢以上の被災リスクの高い森林を対象に、分収造林契約を締結し、育成複層林の造成に向けて伐採から事業を開始する仕組み

イ 持続的な水源涵養機能の発揮

新規の分収造林契約については、全箇所において、広葉樹等の現地植生を活かしつつ、長伐期かつ伐採面積の縮小・分散など、施業方法を限定した契約を締結しました。育成複層林誘導伐の実施も、毎年、高い成果を上げ、さらに「市町村等との連携による造林未済地解消対策」について、大分県玖珠郡九重町ほか計3自治体にて実施し、植栽を完了しています。



写真1：針広混交林（山口県萩市）



写真2：育成複層林（高知県四万十市）

2 事業の実施手法の高度化のための措置

ア 森林整備技術の高度化

森林施業の効率化・生産性の向上に向け、エリートツリー等の成長の早い苗木の植栽において非常に高い実績を上げたほか、伐採・造林の一貫作業システムの導入、UAV（ドローン）の目視外飛行操縦者の育成、獣害対策の実施などにも取り組みました。また、研究開発業務（森林総合研究所）と連携し、保持林業についての実証地を設定し、さらにこの取組を全国で着実に推進するよう、知識・技術の高度化を図りました。このほか、能登半島地震・豪雨の被災森林については、被災状況を安全かつ効率的に把握していくための技術指導など、造林者の技術の高度化を推進しました。

イ 木材供給の推進

令和3年度から高い搬出実績を上げたほか、買受人が法令上の適合性や搬出時の効率性を考慮しつつ、年度毎の伐区設定を行えるよう、対象箇所全体をまとめて販売する「一括販売」の手法を導入したり、今後の主伐販売業務の増加を見越して、木材販売に関する職員のスキルアップを図るなど、木材の安定供給に資する取組を推進しました。



写真3: 技術高度化による被災森林の状況把握
(石川県鳳珠郡穴水町)



写真4: 木材供給の推進(長崎県西海市)

3 地域との連携

ア 災害復旧への貢献

自然災害に備えた森林整備協定の市町村等との締結を進め、自然災害の発生に際しては、被災森林の復旧整備を確実に実施したほか、台風被害により孤立した集落のライフラインの確保のために水源林造成事業で整備した作業道を提供したり、岩手県大船渡市の林野火災についての対応等を行いました。

イ 森林整備技術の普及

毎年、技術検討会を開催し、研究開発業務等の職員参画のもと、最新の研究成果等に関する講演・実習を通し、造林者や地域の林業関係者等に対する技術普及を進めました。このほか、鳥獣被害対策コーディネーター育成研修事業への協力、花粉の少ないスギ苗木生産用の穂木採取への協力、令和6年度からは大分県立日田林工高等学校の要請に応じ、同校への演習林の提供や林業実習の支援を行っています。



写真5: 林野火災の復旧(岩手県大船渡市)



写真6: 森林整備技術の普及(山梨県斐崎市)

みどりのとびら ～つたえま水源林～

森林整備センターの日常業務や地域との関わり等の様々な情報を
職員の自由な視点からお伝えしていくページです

各地の森林・林業・緑化イベントに出展します！

今後の主なイベント



森林整備センターが出展予定の各地のイベントの一部をご紹介します。
木偏の漢字クイズや木工・工作、木製品への絵付けなど、
皆様に楽しんでいただける企画をご用意しております。
なお、内容はイベントごとに異なりますので、あらかじめご承知おください。
開催時間や他の出展者等、詳細についてはイベント主催者等にお尋ねください。



日 に ち	イ ベ ント 名	開 催 場 所
10月3～4日	優しい木のひろば	グランツリー武蔵小杉（神奈川県川崎市）
10月3～4日	奈良の木づかいフェスタ2026	イオンモール大和郡山（奈良県大和郡山市）
10月10日	とやま森と木のフェスタ	県民公園太閤山ランド（富山県射水市）
10月17日	第25回森林を考える岡山県民のつどい	グリーンヒルズ津山（岡山県津山市）
10月17～18日	久万林業まつり2026	久万公園ほか（愛媛県上浮穴郡久万高原町）
10月17～18日	もくもくエコランド森林環境学習フェア	東洋電化中央公園（高知県高知市）
10月17～18日	令和8年度大分県農林水産祭 「おおいたみのりフェスタ」	別府公園（大分県別府市）
10月16～18日	里山フェス in 秋吉台 ※当センターは18日のみ出展します。	秋吉台家族旅行村（山口県美祢市）
10月24～25日	とくしま木づかいフェア2026	あすたむらんど徳島（徳島県板野郡板野町）
10月25日	水都おおさか ^{もり} 森林の市2026	毛馬桜之宮公園 桜ノ宮合同庁舎 （大阪府大阪市）
10月31～ 11月1日	第47回石川の農林漁業祭	石川県産業展示館（石川県金沢市）
11月7日	幡多山もりフェス2026inSUKUMO	宿毛市総合運動公園（高知県宿毛市）
11月8日	ひょうご里山フェスタ2026	（県立播磨中央公園） 加東市地域交流センター（兵庫県加東市）

日頃から森林整備センターの業務にご理解とご協力をいただき、誠にありがとうございます。
現在、当センターでは、「季刊 水源林」について、よりよい誌面づくりのため、読者アンケートにご協力をお願いしております。

▼アンケート回答はこちらから（下記URL又は2次元コードからアクセスしてください。）

<https://forms.cloud.microsoft/r/4iSGyPsF6k>

※設 問 数：7問／所要時間：約3分／無記名

※回答期限：令和8（2026）年11月27日（金曜日）まで



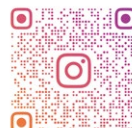
発行

国立研究開発法人 森林研究・整備機構 森林整備センター

〒212-0013 神奈川県川崎市幸区堀川町 66-2 興和川崎西口ビル 11 階

電話：044-543-2500（代表） FAX：044-533-7277

Mail：info@green.go.jp HP：https://www.green.go.jp/



FMC_GREEN



本誌に使われている紙は、
日本の森林を育てるために
間伐材を積極的に使用しています。

リサイクル適性
この印刷物は、印刷用の紙へ
リサイクルできます。